

令和6年神奈川県議会第2回定例会 社会・健康対策特別委員会

令和6年7月1日

◆鈴木ひでし委員

私、ヘルスケアというのが久しぶりというか、委員会で話をするなんて二十数年間なかったからさ、あなた方に。ただまあ本当に変わらないなと、十何年前と、皆さん方の答弁も何も。今日は抜本的なところからちょっと聞かせくださいな。

このイントロドンで2行目に、最先端医療・最新技術の追求と未病の改善ということで、今特化してヘルスケアやっていますよと。ところが、そもそも前から私言っているけれども、ヘルスケア・ニューフロンティアの目指すマクロ的な施策って何を目指しているの。県民に対してどんなようなマクロ政策をして、そのゴールはこうですよというふうなものは何しているの、これ。要はずっと話聞いていると、これやりました、あれやりましたと、こんなの書くことはいっぱいできると思うよ、俺。あんた方、これがとんでもない新しい技術とかと話をしますよ、これやっています、あれやっていますというミクロの政策するんだったらもうこんな議論なんか必要ないと思うんだ、私。あんた方、こうです、ああですと細切れで、いや、これは幾つですみたいな話をしているんだったら、このヘルスケア・ニューフロンティア、そもそもは未病なんだから。未病なんて微妙なんだよ。微妙だから何言っても全部通じるんだよ、未病って。

だから、私がまず聞きたいのは、それこそあんた方がやっている、そもそもはゴールはどこなんだ。そこまでにどういうことをやろうというようなロードマップはどうなっているの、これ。相も変わらずだらだらだらだら、いろいろなME-B YO B R A N Dだ、ああだこうだと、何質問していいか分かんないよ、こんなの。全部質問したいけれども。どうですか、これ。

◎連携調整担当課長

ヘルスケア・ニューフロンティア政策は、超高齢社会を乗り越えるという目的のために、健康寿命の延伸と新たな産業の創出を目指して、最先端医療・最新技術の追求と未病の改善を進めてきました。産業政策と保健医療政策を融合した政策を進めているものと認識しております。

◆鈴木ひでし委員

あなたが今、大事な角度言ったよね、健康寿命。ところが一つも足らないじやん。昨年のたしかデータを私、見たけれども、神奈川県5位だよ、女性に至っては15位だよ。あなたがそういう答弁しているんだったら、そこの道のりはどうなっているんだよ。ロードマップなんか何もないじやん。毎年総括だってないだろうよ。たしか昔、議会でもって健康寿命論争があったけれども、それをしろとは私は言わん。ところが、何かのゴールがなくて、これやりました、あれやりましたという話をしたって何もならないだろと私さつきから言っているんだよ。そういう答弁は何回も聞いた。そうでなくて、あなたが言った健康寿命に関わるロードマップとはどのような形で出来上がっているの、神奈川

県として。

◎連携調整担当課長

健康寿命のロードマップというところは、ストレートにこちらのほうからお答えするのがなかなか難しいのですが、これまでの答弁の中でも、健康増進や未病改善の手法だと個人の効果というのは多様で、なかなか相関性を示すことは難しいということを認識しております。こうした中で、健康増進、未病の改善に向けた取組を産業と一緒にやることで、皆様にいろいろなエビデンスのある商品・サービスを多くの方々に提示できるように取り組んできたところでございます。

◆鈴木ひでし委員

それはあなたじゃなくたって、全産業でやっているよ。だから、何で県として公として特化してそういうところに何をしたんですかと私は聞いているの、さっきから。どこの産業だってみんなそうだ、がんだって何だってみんな、どこだっていっぱいやっているよ。みんな健康寿命のためにやっているんだ、ある意味では。健康だってそうだし、食べるものだってそうだし、特にその中で特化してあなた方、この未病産業という、ヘルスケア・ニューフロンティアってだから何を目指して、どこをどうしているんですかというのを私さっきから聞いている、それを分かりやすく教えてくださいな。

◎連携調整担当課長

ヘルスケア・ニューフロンティア政策では、未病改善の要素となる食、運動、社会参加、それから……

◆鈴木ひでし委員

いや、だから聞いているって、さっきからそれ。何度も同じこと繰り返さんで、時間がないんだからさ。そこが、私はまあ特別委員会だからここで止めておくよ。そもそもがそういうゴールもなくてやっているから、だらだらだらだと、申し訳ないけれども、ここにいろいろ文字がいっぱい書いてあるの。もっと聞きたいことはいっぱいあるよ。この未病女子とかいうのだって、これもう何でこんな、124万件もアクセスが入っているのに、たかだかともだちになっているのは4,568件なのかとかさ。こんなのが1回見たら、これは厳しいんだと思ってこっちへ行ったんだろう。全部見てみると、これやりました、あれやりましたと書いているけれども、その総括がないんだよ、あんた方というのは。常任委員会じゃないからこれ以上私言わないよ。

まずはあなた方に言っておくけれども、そろそろ出さないと、十何年間もやっていてみっともないよ。あなた方、総務政策のところでこういうふうな論議がないんだろう、きっと、勘だけれども。特別委員会だからこういう形でもって出てきて、答弁がこういうふうな形になるんだよ。だから、まずは一つきつと、ロードマップと何を目指すのか、そういうのを明確にそろそろしないと、そのうち私も本会議場でやりますよ、一発。よろしくお願ひしますよ。ねえ牧

野部長、頼みますよ。

その中で、私これ見ていてびっくりしちゃったな。まずこのアのところだよ。最先端医療・最新技術の追求という中に、一番最後の行に社会実装に取り組むと書いてある。これ社会実装やったのは何があるの、これ。要するに、県民が、分かりました、それつけています、あーすごいねというのは何があるの、これ。

◎ライフイノベーション担当課長

社会実装とは、新しい技術やサービスが……

◆鈴木ひでし委員

そうじゃなくて、何があるのと聞いているの、具体的に。そんな話はいいよ。

◎ライフイノベーション担当課長

例えば、湘南地域のプロジェクトで現在研究をしております、指先に装着したセンサーで転倒を未然に防止する技術というのが社会実装、それが医療・介護施設での転倒防止対策ですか従業員の転倒災害対策につながることが期待できます。

◆鈴木ひでし委員

社会実装だよ、あなた。どこかでやっているということを私聞いているんじやなくて、社会実装とは県民がみんなシェアすることだろう、認知して。それ、どんなものがあるのと言っているんだよ。もう何十年もやってきてさ、十何年もやってきて、何があるの、こんなの。

◎科学技術・ライフイノベーション担当部長

コロナの前から、感染症に関していろいろな支援をしてまいりました。研究支援も含めてしてまいりました。コロナが起きました、実際に我々、当然初めは試薬がないということで、今まで支援した企業と連携しながら新しい試薬等を作ってきた。そういうことを踏まえて、機械を作って、いろいろな試薬を作って、県民の方に病院に行こうと。すみません、先生のユーチューブでも紹介していただいた部分はあるんですけども、なかなか県内にはうまく、先生おっしゃったように実装までいかなかった。ただ、それと連携しながら、抗原検査という別の部分についても我々も研究支援をしながらやっていて、実際、県民の方が自宅から出ないために自分で検査をしたりという部分があって、それは抗原検査キットというのが当時ございました。ただ、なかなか国のほうでは当時はそれはまだ自宅では使えない、病院でしか使えない。我々は、これを県内に製造工場を持っている抗原検査会社に12億円分ほど寄附を頂きまして、実証試験をやらせてもらって、結果的に子供、お子さん、いわゆるワクチンを打てない方の世帯対象、全体に対してやったと。これは一つ社会実装になったかなと。

もう一つだけ先生、すみません、結果的に今ドラッグストア、薬局では、国のはうは神奈川県の実証試験を一つの例に、サンプルにしながら、いわゆる薬

局とかドラッグストアで今、抗原検査キットを買える状況に変わってきています。これは一つ我々とすると、ヘルスケアとしての大きな成果かなというふうに思っています。

◆鈴木ひでし委員

それは手前みそという、もうちょっと謙虚になつたらどうなんですか。一つには、検査キットそのものの自体なんて、当時なかった。あのときにとんでもないほどの数が出てきたんだったとしたら、私は大いに褒めますよ。ところが、あのときも基本的には時の流れとともにそういうものが流通してきた。また今、ねえ、部長が言ったような、例のユーチューブでもって上げて、1,000近い者がみんな見てくれましたけれども、じゃそれも実装にならなかつた。

要はあなた方がやっていることというのは、私すごく心配しているのは、普通の企業とか普通の団体とか、まあどこもそうだけれども、ゴールがあって、その中に今どこにいて、いつまでこれをやって、このようになりましたとならない限り、その部署はもうないんだよ。あなた方を見ていると、この一つ一つのこういうふうなものが分からぬ、正直言って。分からぬところで、何をしているのか分からぬというのが私たちの率直な感想だよ。分からぬところで、何かは分からぬけれども、そういうヘルスケア・ニューフロンティアという部署があるけれども、何をやっているか私たちは分からんのだよ。それが率直な感想だよ。

だから、今あなたが立場上、まあ強弁されたけれども、俺たち絶対そんなこと認めたくない。だって実装というのは、多くの方が、なるほど神奈川県がこうやってやってくれたというようなものにならなきやならないけれども、委員会の中だからあなたの話というのは通じるけれども、何のことじやいなと、今失礼ですが町を歩いている方が1人ここに来たら、何の話をしているんだ、あなた、という話にならないか。それは、実装とはかけ離れたものにならないのかと私は思ってるわけですよ、一つは。

その中で、もう一度あなた方にお願いしたいことは、大層なことが書いてあるけれども、もう一度目標を明確にして、自分のやっているものというのは、本来なら提出してもらいたかったのよ、どんなプロジェクトがあるんだと今、あなた方のヘルスケア・ニューフロンティアの中で。それが何本あって、それがP D C Aサイクルの中から言つたらどこにあるのかというふうなこと見える化しろ。本来なら本気で本会議場で私、質問したいぐらいだよ。そうしなかったら、ここでやっている論議というのが一つ一つ全部細切れのような形で、話をしたって何にもなんないじやないかよ。委員会でもって、これだけの委員が皆さん質疑されているんだから。私は第1点、それだけお願いしたいと思います。やるかやらないか、皆さん方もどれだけ立場が変わるのが知らないからさ、言っておくけれども。

二つ目、私はね、このウの国際展開、スタンフォード大学で覚書やつたというけれども、覚書の内容というのは何、何を覚書したの、簡単でいいよ。

◎連携調整担当課長

スタンフォード大学医学部とは、产学公連携モデルとして有名な大学ですので、ライフサイエンス分野の中で連携をして、企業へのアドバイスとか産学官の連携、ネットワークの支援をしていくという、そういう形の覚書になっております。

◆鈴木ひでし委員

私はそんな詳細を詰めるつもりはないけれども、今あなたがざっくり言っているけれども、だからそれが、覚書が、何のどういうインパクトがあったの。そもそもスタンフォード大学というのは、私の記憶の中では工学とか数学とかそういうところはめちゃくちゃ人気がある大学だよ。医学部とあなたは簡単に言っているけれども、正直言ってあまり知らないよね、スタンフォード大学の医学部なんていうのは。そこから何かとんでもないものが出てきたとか、私はあまり存じ上げない。私の知識のなさかもしれない。だけれども、さっきからスタンフォード大学、またシンガポールのああだこうだと、覚書と言っているけれども、別に覚書というのは単なる覚書だよ。契約があるわけじゃないじゃん。それを何かやたら、私は何でこれにこだわるのかというと、前に新聞ネタにもなって、皆さん方にいろいろしたけれども、こういうふうに派遣して、県の給料でもってやった派遣員が結局辞めてしまったということを追及させてもらった。こういう覚書とかそんなような形で、何か国際展開とかも、どうしてこうやって文章ばかりでこんなことになるんだろうと、エイジフレンドリーシティとかさ。そういうふうなことを一つ一つ、何でそういうふうになったのかという起承転結というのをここに書かないと。やりましたやりましたしか書いていない。それをすごく心配しています。私、本当に指摘しておきます。

さあ、時間がないんで最後の質問しますが、これさっきからME-B YO B R A N Dが出ていた。ME-B YO B R A N Dと一生懸命言っていて、今、そうなんだなと思ったのは、まずは会員であることなどと、あの未病産業研究会の中で。だって、会員、研究会の中に入っていたら、この対象にならないという部分であるならば、あまたそれぞれいっぱいあるじゃない、アプリから何から。そういうものの中で、なぜ逆に、私から見ると県内で、だって県内で育てるのが本来の未病のブランドなんじゃないの。あんた方が未病というふうなことは、黒岩さんがそうやって何とかしたいと言っているんだろう。じゃ、県内でそういう人たちを育てていく、そういう企業を育てていくというのだったら私分かるよ。この中に入ってなきやならない、確かに1,135社かもしれないけれども、大手も入っていれば、いろいろなものが入っているでしょう。そこに入らなければそこの中の対象にならないという、これほど理不尽なことはないと思うけれども、いかがですか、税金使っているんだよこれ。

◎未病産業担当部長

ME-B YO B R A N Dについては、もちろん産業振興の観点もあるんですけれども、むしろ県民ですか市町村がどういう商品・サービスを使いたいかと。そのときに、安全性と有効性、そのところをしっかりと御案内すると、

そういう観点がございます。あと、ME-B YO B R A N Dの手続等を、これは必ず我々は研究会のマーリングリストに流しますので、当然我々がいいと思った案件があれば、それは我々から話をして研究会に参加していただいて、その中で御案内もしますし、先方からも、大体一番最初に我々と一緒に話をするときに、研究会のところからブランドのほうということの流れになっておりますので、そのところは未病産業研究会の会員であるということが、ブランドへの申請の門戸を狭くしているということはないんだろうと思っております。

◆鈴木ひでし委員

じゃ、そもそも聞くけれども、このブランドはどれだけ浸透力があるの。県民は誰も知らないと思うよ。一つ例を出しましょうか。私、そうなんだと思ったのは、先ほどの質問の中だったら、このN-N O S Eっていうところ、これコマーシャルでやたら出ているじゃん。ところがあそこに神奈川県のME-B YO B R A N Dなんてどこも書いてないよ。何か小さなかわいいスズメみたいなのがいっぱい出てくるよね、スズメじゃないかな。それは出てくるけれども、県民ブランドはどこにも書いてない。もう一つ、いや、まあいいよ、まああなた聞きなさいよ。

もう一つは、驚いたんだけれども、ほら、ベジチェックというの。これこの前、林修さんのテレビで、鎌田さんか何かが出てきて、これを出てきている芸能人に全部やって、こんなのあるんですかというふうに言っていたけれども、結局そんなところにME-B YO B R A N Dなんてどこにも出てこないよ。そもそもが、ME-B YO B R A N Dというもの自体がどれだけ県民への浸透がされていると思っているの、これ。

◎未病産業担当部長

ME-B YO B R A N Dのロゴをどういう場面でどういうふうに使うかというの、これは当然各企業さんの判断がございますので、そこはいろいろなパターンがあるんだろうと思っております。

あと、やっぱりブランドを認定する意味としまして、当然広告効果だけではなくて、先ほど先行会派の質問でも回答しましたが、ブランドに認定されることで実際の产学研連携が進んで、例えばロボットスーツHAL、これは医療機器だけではなくて未病にも展開と。これはME-B YO B R A N Dによって進んでいくところでもあります。そういう形で、いろいろな形でME-B Y O B R A N Dをどういうふうに使うかと。これは我々と企業さんが実際にやるときに、ディスカッションをして最適化を図っていくということになると思います。ただ、そのME-B Y O B R A N D自体が、物すごく大きなそういうPR効果があるかというと、先生が言われた話というのは、今事実だと思っています。

◆鈴木ひでし委員

今、HALの話ししたよね。何台ぐらい入っているの、今、県下に。

◎未病産業担当部長

県内に何台入っているかというのは、これはちょっとサイバーダインのほうの企業情報になりますので、そこはちょっと我々把握はしていませんが、ただ、以前ですと、かなり湘南ロボケアセンターで専門施設だけでやっていたところが、昨今、腰タイプも含めて、高齢者施設ですとか一般的なクリニック、ここにも入る段階になってきていると。これは神奈川県のME-B YO B R A N Dの我々と一緒にやった成果でありますので、そこは今後しっかりと進めていきたいと考えています。

◆鈴木ひでし委員

じゃ、何でロボットそのものの自体の中で、サイバーダインのHALというのがだよ、私が固有名詞でもって出して話をするけれども、何でいまだにリハビリやそういうふうなところで、一般的のところで使われていないの。だって、何も見たことないと思うよ。私も10年前から知ってるよ、これ。ただ、そもそもはくつつけなきやならないんで、意識信号で。失礼ですけれども、私、何人かの方からお聞きしたけれども、電気信号でこういう形でもってやりながらリハビリというのはなかなか難しいとおっしゃっていたよ。だから、あなたが今、個人情報でもってそういうことが言えないというんだったらそれでも構わないけれども、じゃ、サイバーダインのHALというの、どれぐらいの人が県民の中でもって実装として知っているかということだよ。

◎未病産業担当部長

先生おっしゃられた、日本国内でHALの認知度と広がりが期待よりも薄いというのはおっしゃるとおりです。ただ、それは決してサイバーダインと我々のやり方だけに問題があるのではなくて、日本でやっぱり新しい商品・サービス、これは海外に比べて非常に受け入れにくいという文化性があるのも事実です。ですから、サイバーダインのHAL、むしろ海外のほうで売れている中で、国内でのところが苦戦しているということも、若干これはサイバーダインのところとしてもあります。ただ、そのところは、我々としてはしっかりと県民にそのエビデンスを届けながら、先ほど申し上げた県内の医療機関でも、HALのエビデンスをしっかりと理解して、これは慶應義塾を含めてどんどん広がってきておりますので、これは県内にちゃんと広げていきたいということで取り組んでいきたいと思っています。

◆鈴木ひでし委員

いや、あなたがそういうふうに例としてHALを出したから私は言ったんだよ。そもそもが、認定自体が40の中で、どれくらいの実装数があるの。要するに、この中で出てきている40というブランドの中に、社会の中でもって実装されたという実装率というのはどれぐらいなんですか。

◎未病産業担当部長

社会実装という言葉そのものに多分広い意味があるということは、これはず

っとここ10年間の課題だと思っております。ただ、その中で、我々の実装の話、もちろん全員がそういうふうに知るというパターンもあれば、一つのテクノロジーをいろいろな場面で応用展開していくと、これも社会実装ですごく重要なところだと思っていまして、我々例えは先ほどのH A Lで言えば、医療機器だけではなくて、未病のそういう認知機能のほうへの展開ですとか、こういうふうなのは我々が進めてきたところですので、それは社会実装に向けての非常に大切な取組の一つであると、これから頑張っていきたいと思っています。

◆鈴木ひでし委員

あなたの決意発表はここまでにしておいて、あと一つだけ言っておくよ。この中で、今回新たに認定された脳の海馬の育成に着目したB r a i n U pというの、これをちょっと見させてもらった。とてもいい試みだと私は思います。ただ、運動のアプリという、このB r a i n U pという運動アプリがまたここで出てくる。そうすると、未病指標というふうなことを進めている人間の中からしたならば、また新たなものがここから出てくる。本来ならこのものの自体が、あなた方がお金なりなんなりしてライセンスを取って、未病指標まで入れればいいんじゃないかと私は思うわけだよ、当たり前のことだよ、笑っているけれどもさ。こういうふうなことを何も書いていないで、だからさつきからあんた方が強弁、実装されていると騒いでいるけれども、どうかこのME-B YO B RANDということ自体のきっちとした実装をしろということと、この中の40項目に対して対応しろということをお願いしたいと思います。

それで、私、最後に、時代はいろいろ変わって、さつきからがんの話も出ていた。先日の6月30日に神奈川新聞でがんゲノム検査の負担軽減検討と出てきて、これからはゲノムの社会であることは間違いない。そもそも治療前のところも、治療に入ったところから、がんの血液検査でもって対応しようというような話だ。これも政府としてやっていこうという話でした。これを見ていくと、今までの要するに未病とかと言っていたことの概要ががらりと変わってくるだろう。今度は六十何%という話が出た。治癒力というか、またその新しい治療を発見できる可能性が、ややの可能性も入れると80%、すごいことだと思う。同時に、先日私も見たんだけれども、ゲノムの編集治療というのがある。C R I S P R-C a s 9というのが新たに出てきて、これはもう昨年の23年12月にC R I S P R-C a s 9が出てきた。酵素できちっと悪い部分のゲノムを切るというような形だ。

申し上げるけれども、いつまでもあんた方が既存の中で要するにやっていて、未来の医療というようなものに対して手を打たなければ、いろいろな何か適宜こういうふうなものを各論で出すのは結構だけれども、そういうものは私は終わりを迎えるんじゃないかというふうに思いますので、それだけ警告しておきますよ。

以上、終わります。